

ミス・ヒューズによる スウェーデン式体操のすすめ

木 村 吉 次

目 次

- (1) 問題の提起
- (2) 「ヒューズ嬢」の来日
- (3) スウェーデン式体操のすすめ
- (4) スウェーデン式体操に対する態度の比較
- (5) 結 語

(1) 問題の提起

普通、わが国に最初にスウェーデン式体操が導入されたのは、1902（明治35）年頃から行なわれた川瀬元九郎の紹介・普及の活動によるものとみられている。

しかしながら、わが国におけるスウェーデン式体操の導入・受容の過程について若干の検討を進めたとき、¹⁾ 上記の理解を無条件に肯定してよいものかどうか疑問が生じてくる。

スウェーデン式体操を基礎としてわが国最初の学校体操教授要目をつくりあげた永井道明は、その教授要目を解説した際に回顧しつつ次のように述べていることに注目しなければならない。²⁾

我が国に於て瑞典式体操として初めて其の声を聞いたのは、自分の臆
気なる記憶に依れば明治三十四、五年頃ヒューズ嬢の来朝たる（したる
？一筆者）際同嬢の口より勧められたる一事であると記憶する。明らか

に之が奨励の声を聞き始めたのは、明治三十五、六年頃よりドクトル川瀬元九郎氏の唱導である。併し其の实地に行はれたのは井口アクリ女史の帰朝してからの事である。

永井が語るスウェーデン式体操の来歴は、ヒューズ嬢（勧奨）→川瀬（唱導）→井口（実施）という順序でとらえていることが明らかである。もしこれが事実とすれば、川瀬元九郎によってスウェーデン式体操の普及と紹介の活動が行なわれる以前にすでに「ヒューズ嬢」によるスウェーデン式体操の勧奨があったわけで、スウェーデン体操の最初の導入の事情を明確にするためには、この「ヒューズ嬢」による勧奨の事実を究明しておく必要があると考えられる。

従来の日本近代体育史研究の実績に即してみた場合、意外にこの「ヒューズ嬢」のことがとりあげられていないことに驚かされる。僅かに岸野雄三氏が次に引用したような敘述の中でふれているのが見出される程度である。³⁾

川瀬は普通体操の欠陥を記憶体操と結論し、音楽や号令で、一連の体操を間違いなく行うために種目や連続を記憶させる体操を形式主義と非難し一つ一つの運動をことばで示しながら、演習の基本順序に基いて行うスウェーデン体操を強調した。当時日本に招聘されていたケンブリッジ大学の女子高等師範部長ヒューズも各地の講演でスウェーデン体操は女子に最適の体育法であると推奨している。36年井口女史がボストンから帰国するや、こうしたスウェーデン体操は文部省講習会などを通じて現場の関心を集めた。（傍点引用者）

しかし、ここでは川瀬の活動とヒューズの来朝とがほとんど同じ時期のものとして敘述されているので、ヒューズと川瀬のいずれが早かったかという先後関係は問題になっていない。そこで本稿は、こうした点を検討することによって、スウェーデン式体操がわが国に導入された頃の事情を一

層明らかにすることを課題とするものである。

- 1) 筆者はわが国におけるスウェーデン式体操の受容過程に関して検討したところを拙稿「川瀬元九郎とH・ニッセンの体操書」(『中京体育学論叢』第13巻第1号, 1971年, pp. 153—189) に発表した。
- 2) 永井道明『学校体操教授要目の精神及び其の実施上の注意』大正3年, 教育新潮研究会, p. 18.
- 3) 岸野雄三・竹之下休蔵『近代日本学校体育史』昭和34年, 東洋館出版社, pp. 63—64.

(2) 「ヒューズ嬢」の来日

これまで「ヒューズ嬢」といつてきたが、これは当時わが国教育界で呼称されていたまま用いたものである。また改まったときには、「イー、ビー、ヒューズ」と記名されている。英語では Miss Hughes と記されているのが、見出されるが、しかし E. P. Hughes と記した例は筆者の見た範囲では見当らなかった。

こうしてみると、Miss Hughes をそのまま「ヒューズ嬢」というように訳したものと思われるが、この Miss Hughes がいつ来日し、いつまで滞在したかを次にみてみよう。

帝国教育会は、明治34年10月12日に「ヒューズ先生歓迎講談会」を開いた。Miss Hughes はこの席で「英国人の立場より見たる女子教育」の講演を行なった。これは帝国教育会の雑誌であった『教育公報』第253号に掲載された会報記事(資料1)によって知ることができる。¹⁾

(資料1)

ヒューズ先生歓迎講談会 十月十二日午後一時開会

浜尾新同夫人, 徳川達孝伯同夫人, 南摩綱紀, 伊沢修二, 船越衛男, 沢柳政太郎, 三浦安, 馬屋原彰, 理学博士箕作佳吉, 文学博士中島力造, 嘉納治五郎同夫人(人の誤植?—引用者), 佐野安, 山口造酒, 村井知至, ミセス・グリシ, ミス・ウォーシングトン, 三輪田真佐子, 安井哲子, 津田梅子其の他の来賓出席辻会長は先づ開会の旨趣を述べ、

ヒューズ先生を一同に紹介し其より先生は『英国人の立場より見たる女子教育，殊に経済的，社会的，国民的必要』と題して流暢なる岸本能武太氏の通訳により凡そ一時間余の演説をなし聴衆凡そ五百名余にして中々の盛会なりき。

この資料によれば帝国教育会における Miss Hughes の講演会が「歓迎講談会」と銘打って開かれたものであることからして、Miss Hughes の来朝はこの講演のあった明治34年10月12日より少し前の頃と推定できる。同じく教育雑誌の『教育界』第1巻第1号の内国彙報欄に「ヒューズ嬢の教育演説」の記事があり，ここでは「日下我国に來遊せる前ケンブリッヂ女子高等師範学校長イ，ヒー，ヒューズ嬢は，去る十月十二日帝国教育会に於て一場の演説を為せり。（後略）」²⁾（傍点引用者）と記されている。

Miss Hughes は日本に滞在中に教育視察を行なうとともに講演なども行なったわけだが，とくに，東京高等師範学校においては十数回にわたる教授法の講義を行ない，その講義筆記は，イー，ヒー，ヒューズ嬢講述，本田増次郎，棚橋源太郎共訳『ヒューズ嬢教授法講義』（明治35年8月15日，山海堂）として出版されている。東京高等師範学校嘉納治五郎は，この書に序文を寄せて，Miss Hughes の紹介を簡単に行なっている。ここでは「ヒューズ嬢は，多年ケンブリッヂ大学女子高等師範部長の重職に在りて，實に英国有数の教育家なり。曩に，英國政府より，海外教育視察の命を被り，既に欧米諸国の視察を終り，本年一月始めて我邦に來る」³⁾（傍点引用者）といわれているが，この序文の執筆が明治35年7月と記されているのだから，明治35年1月来朝というのは明らかに嘉納の記憶ちがいか誤記と思われる。

次に Miss Hughes はいつ頃離日したのかが問題だが，その点では帝国教育会が明治35年7月5日に Miss Hughes も演者の一人として英語授業法講演会を開き，そのあとで「ミスヒューズ先生送別茶話会」を催しているのに注目しなければならない。『教育公報』第262号の会報欄には次のような和文と英文のプログラムが載った。⁴⁾（資料2）

(資料2)

○英語授業法講演会次第を定むること左の如し

英語授業法講演会

一 日 時 七月五日午後一時半

一 場 所 帝国教育会講堂

一 講 話

(一) 英 語 教 授 法 男爵 神田乃武先生

(二) 英語教授に就て イー, ヒー, ヒュース先生

通訳者 本田増次郎先生

ミス・ヒュース先生送別茶話会

一 日 時 七月五日午後五時

一 場 所 帝国教育会内

一 会 費 金 八 拾 銭

(日本音楽の催あり)

明治三十五年六月 以上

PROGRAMME.

LECTURES.

Method of Teaching English.

By Baron Kanda

(To be delivered both in English and Japanese)

On the Teaching of English;

the topics treated being;

I. Sound versus sight in language learning;

II. The place of translation;

III. The function of the foreign teacher;

IV. The value of English literature.

By Miss Hughes.

(To be interpreted by professor Honda, of the Foreign Language school)

Time : 1. 30 p. m. July 5th.

Place : Teikoku Kyōiku Kwai (Imperial Educational Society)

21. Hitotusbashi-dōri, Kanda-ku.

Subscription 10 sen.

FAREWELL RECEPTION

Time : 5 p. m. July 5th.

Place : Teikoku Kyōiku Kwai (Imperial Educational Society)

21. Hitotusbashi-dōri, Kanda-ku.

Subscription 80 sen.

(Some Japanese musical performances will be given.)

(It is expected that the lectures will end by about half past four.)

このときの模様は『教育時論』第621号によると、「帝国教育会はヒューズ嬢が遠からず帰国の途に上るを送らん為、去る五日送別会を開きたり同日は午後一時より全会講堂に於て、英語教授法に関する嬢の講演あり、全五時より宴会に移り、音楽の余興ありて、午後八時頃散会したり、来会者は辻会長、菊地文相、久保田護氏、神田乃武氏、其他八十名許なりき、(後略)」⁵⁾ (傍点筆者) と記されている。

こうしてみると、Miss Hughes は明治35年7月5日から幾許かの後に日本を離れたものと考えられる。したがって、彼女が日本に滞在したのは、明治34年10月から翌35年7月までの約9カ月間であったと思われる。

彼女は「元英国ケンブリッジ大学女子高等師範部長」という肩書で、英国政府から海外の教育事情視察を命ぜられて来日したことになっている。この点で今日においても彼女を「ヒューズ嬢」というふうと呼ぶことはあまり適切でないように思う。それよりはむしろ「ヒューズ女史」という方

がまだよいかも知れないが、今日では「女史」という言葉もいくらか占めかしく感じられるし、またときにはいささか敬遠しているかの如き印象を与えることもある。しかしながら、それにかわるもっと適切な表現があるかという、それも見出せない。したがって、以下においては **Miss Hughes** をそのまま「ミス・ヒュース」というように呼ぶことにする。

ともあれ、ミス・ヒュースは前述したように凡そ9カ月間日本に滞在して、その間に教育事情を視察したり、講演を行なったりしたわけである。そして、最初に問題としてとりあげたスウェーデン式体操の推奨ということは、そうした講演の際に行なわれたものである。この点については次に考察することにするが、帝国教育会では明治34年12月24日付で辻新次会長名によって彼女を帝国教育会の名誉会員に推したほどであった。⁶⁾

- 1) 『教育公報』第253号(明治34年11月15日) p. 30.
- 2) 『教育界』第1巻第1号(明治34年11月3日) p. 153.
- 3) イー・ビー・ヒュース嬢講述、本田増次郎・棚橋源太郎共訳『ヒュース嬢教授法講義』明治35年、山海堂、序、p. 1.
- 4) 『教育公報』第262号(明治35年8月15日) p. 32. これは講演会の案内とみられるものだが、実際には講演会が済んだ後で雑誌が出ている。
- 5) 『教育時論』第621号(明治35年7月15日) p. 31.
- 6) 『教育公報』第255号(明治35年1月15日) p. 33.

(3) スウェーデン式体操のすすめ

さて、問題のミス・ヒュースがわが国で最初に「スウェーデン式体操」を教育界の人々にすすめたという事実だが、たしかにそれらしいものは彼女が来日早々に行なった講演、すなわちさきにふれた帝国教育会の「ヒュース先生歓迎講談会」(明治34年10月12日)における「英国人の立場より見たる女子教育」の講演の中に見出すことができる。

彼女は、女子教育に関して9つの問題点をあげて論じた。¹⁾ 第1点は女子に進歩の機会を与えないで男子だけ進歩することはできないのだから女子の教育は男子の教育と同様に大切なものであり、したがって女子教員の

問題は単に女子に関係する問題であるだけでなく男子にもまた大いに関係する問題だという。

第2点は男子のみではどうしても女子の理想的教育をなしとげることができないので、女子に自らの見解を発表させる必要があるとする。このためには女子を学校の校長や教頭などの責任ある地位につけなければならないということになる。

第3点はどういう女子教育のあり方がよいかということはまだ確定したものとはなっていないものであって、実際に行ってみてその中から何がよいものであるかを定めていこうとしているのだということである。

第4点としては、女子教育にはどのようにして家庭をつくるべきかということとその内容として含まなければならないということをおこなっている。彼女は、文明国においても女子の仕事（役割）が何であるかということは未定の問題であると断わった上でなお男子には家庭をつくれなと云っている。

第5点に女子教育は女子が将来なすべき新しい職業に対して十分の準備を与えなければならないという。社会が変化すれば女子の仕事も変わる。将来は女子が製造場の監督人や学校の監理者、または病院の世話人にならなければならない。これらの仕事を女子に与える男子は、その仕事ができるような準備を女子に与えてやる必要があると説いている。

第6点は女子の体育に殊に重点を置く必要があると語っているのだが、実はここでスウェーデン式体操をすぐれたものとして推奨しているのである。これは後の引用によって詳しくみることにしたい。

第7点は女子教育というものを学校の教場内だけの教育にとどめず、女子が教場外において十分活潑な生活を行ない十分社会の感化を受けることができるようなよい境遇に入れておく必要があるという。

第8点に、女子教育は男子教育がすでに経験してきたような失策を避けなければならないということを挙げている。そうしたものとしては、例えばギリシア語やラテン語の教育とか中世以来の旧習とかいったものである。

最後に、以上の点を総括して第9点として女子教育は大変重要なものと強調している。そして、さらに付言して婦人に対しては教育は貫うべきものでなく儲けるべきものであり、代価を支払わなければならない、すなわち社会の発達ということを終始考えて、その発達する社会に接触して進まなければならない、そうでなければ時勢に後れて青年者に対して何の忠告することもできなくなるだろうと説き、男子に向っては政治的、財政的、教育的権力は多くは男子にあるために男子の助力なしには女子はほとんど何事もなすことができないと語り、男子の協力を懇請して講演を終わっている。

以上のようなミス・ヒュースの講演の内容をみると、彼女は非常によく歴史的な社会発展の方向を考え、そこでの女性の社会的地位や役割を相対的にとらえ、女子教育のあり方を検討していることが理解される。彼女は女性の社会的地位の向上をめざし、女子教育の発展を大いに企図しているのである。こうした考えの彼女が第6点として女子体育の必要を強調していたわけだが、それはどのように述べられていたかを次にみることにしたい。²⁾ (資料3)

(資料3)

(六)、第六の点は、女子の体育に殊に重きを置くの必要といふことであります。日本に於ては多くの時と多くの力とが女子の体育の為に費されて居るといふことは、甚だ喜ぶべきことであります。どうしても女子は特別な体育が必要なのである、女は元来神経の強い感情の高いものであるから、彼等に高尚な学問をさせるに就いては殊に十分の体育を施すことは甚だ必要であります。其体育はどう云ふ体育を行ふべきかと言ひましますと、詰り運動である遊戯であるが、其遊戯は有益なるさうして自身で能く之を計画し之を組織し得るやうなので無いと余り役に立たない。詰り遊ふ人各々の自由を以て遊べるやうな遊びで無いといかない。之に付ては其道に達した専門の教師が必要なのであって能く其教師は女子の体育を特別に勉強した人が其任に当らぬければならぬ。出来るならば此

体育の教師は矢張り女子であって欲しい。又男女は区別して体操をさすことが大切である。且つ又体育の満足なる方法に於ては必ずや精神上的の結果を以て肉体上の結果よりも重く見るものでなくてはならぬ。今日に於て私の最も完全な体育法と思ふは瑞典に行はれて居る体育法であります。

ミス・ヒュースの女子体育論は以上のようなものであった。ここにはいくつかの原則が示されている。それらを整理してみると次のように要約できる。

- (1) 第一は女子の特性に応ずる特別の女子体育が必要であるということである。この場合、「神経の強い感情の高い」ということが女子の特性として考えられている。
- (2) 第二に女子の体育としてとりあげるべきものは遊戯であるということ、それは有益でしかも自分で計画し組織できるような遊戯でないといけないということである。
- (3) 第三に女子の体育指導のために専門家が必要であること、できれば女子の教師であることが望ましいということである。
- (4) 第四に体操を行わせる際男女を区別して行わせることが重要だということ。
- (5) 第五に体育の方法としては、精神的な効果の方を身体的な効果よりも重視するということである。この点においてスウェーデン式体操〔体育法〕を「今日に於て……最も完全な体育法」と評価し、それを日本の教育界の有力者に推奨しているわけである。

こうして、スウェーデン式体操がすすめられたコンテクストが明らかになったわけだが、ここでの問題点となるものを指摘しておきたい。そうすると、まず第一点はさきにみたようにミス・ヒュースは女性の社会的地位の向上や職業への進出等を希求して進歩的な立場に立っていたわけだが、ここでは女子は元来「神経の強い感情の高い」ものとみる、どちらかといえば伝統的な女性観に立って女子体育論を展開している点である。

しかしながら、ここで自分自身で計画し組織できるような遊戯を女子に適した体育だとしていることに注目しなければならない。つまり、このときスウェーデン式体操のみが推奨されたのではなく、遊戯が重要な女子体育の内容として挙げられていたことは見逃せない。これが第二点である。この点からさらに論及するならば、自分で計画し、組織して行うことのできる遊戯、「自由」な活動としての遊戯、いわば主体的な活動として展開される遊戯を女子体育の内容としながら、命令（号令）— 指示を基本としていて、まさに遊戯とは対極的な位置にあるスウェーデン式体操を最も完全な体育法と評価していることの間に論理的には首尾一貫しないものが見出されるのである。さきの短かい講演内容の文章からだけで判断を下すことにはもちろん限界があることはいうまでもないが、とにかくミス・ヒュースの女子体育は遊戯とスウェーデン式体操の両方を含んだものとして提示されていることを確認しておかなければならない。

この点は次節においてさらに検討することとして、ここでは当初の課題であるスウェーデン式体操の紹介・導入の先後関係を明確にするという問題にもどって考えることにしよう。そうするとミス・ヒュースのさきの講演が明治34年10月12日であったわけだが、これを川瀬元九郎の活動と対比させてみると次表のように示すことができる。

〔Miss Hughes〕	(明治)	〔川瀬元九郎〕
英国人の立場より見たる女子教育（講演）	34・9・15	「呼吸運動に付て」（教育時論No. 591）
	◀ 10・12	
	10・15	「筋力の検査(上)」(同前No. 594)
	10・25	「筋力の検査(中)」(同前No. 595)
	35・1・5	「筋力の検査(下)」(同前No. 602)
	3・31▶	『瑞典式教育的体操法』刊行

	5・5	「瑞典式体操法(上)」(教育時論No. 614)
	5・15	「瑞典式体操法(下)」(同前No. 615)
送別茶話会	7・5	
	8・8	『瑞典式体操』刊行
『教授法講義』刊行	8・15	

川瀬の新聞雑誌等における活動は明治34年の夏頃からみられる。報知新聞紙上では「夏の衛生」³⁾として飲食物や冷水摩擦などをとりあげて論じ、「夏の運動」⁴⁾では深呼吸や朝食前の運動、運動時間等について語っている。教育雑誌でみても上表のように、やはりミス・ヒュースの講演が行なわれた以前に川瀬は活動を行なっているのが見出される。しかし、それらはスウェーデン式体操の紹介や啓蒙普及の活動ではなかった。川瀬がスウェーデン式体操の紹介・普及の活動に明らかにのりだしたとみられるは、明治35年3月31日の『瑞典式教育的体操法』の公刊以後のことである。こうして、スウェーデン式体操のすすめが最初に行なわれたのはミス・ヒュースによるものであったことが確かめられる。しかし、それはこれまでみてきたように女子体育のすぐれたものとしてすすめられただけであって、実際にその方法が具体的に紹介されたというわけではない。このスウェーデン式体操の紹介・導入が実際に行なわれるのはやはり川瀬元九郎や井口アクリの活動に俟たなければならなかったのである。

それにしても、最初に引用したように後年永井道明がスウェーデン式体操の導入を回顧して、ミス・ヒュースによる勧奨の事実を想起していたことを考えるとき、彼女の勧奨がこうした記憶の痕跡としてとどまったことの意義は無視することができないように思われる。

1) 『教育公報』第254号（明治34年12月15日）pp. 1—6参照。

2) 同前，pp. 4—5。

3) 報知新聞第8702号（明治34年7月21日）～第8705号（同年7月24日）参照。

4) 同前第8707号（明治34年7月26日）～第8709号（同年7月28日号）参照。

(4) スウェーデン式体操に対する態度の比較

さて、前節においてミス・ヒュースが遊戯を主とした女子体育の構想を示し、同時にとりわけ方法上の観点——身体的効果より精神的な効果を重視する——からスウェーデン式体操を称揚し、これを勧奨していたことを明らかにしたわけだが、本節ではそうしたミス・ヒュースのすすめの態度をその後における日本人自身による紹介・導入にみられる認識や態度と比較してみることにはしたい。

(i) 川瀬元九郎の場合

まず最初に川瀬元九郎の場合からみてみると、川瀬はとくに女子体育としてスウェーデン式体操を考えるという立場ではなかった。彼はスウェーデン式体操の紹介を志した動機を次のように述べている。¹⁾

「現行体操法の種類、算ふれば其の数一二にして足らざるなり。曰く矯正術、曰く徒手体操、曰く踵鈴体操、曰く球竿体操、曰く棍棒体操、曰く柔軟体操、曰く兵式体操等是なり。而して従来世人の是等を使用するや、何等其の間に疑惑を挿むものなく、何等此の間に改良を施すものなかりき。然るに当今体育熱の旺盛なる、従って是が研究の進歩せる、漸く人の是等に慊焉たらざるの感を懷くものあるに至れり。(中略)

然り而して瑞典式体操は、前述諸体操法の基礎をなせるもの、現行体操法は其の如何なる種類を問はず、皆な是れに発程せざるなし。故に若し現行体操法を主として是に改良を施さんと欲せば、当に是が基礎たる瑞典式体操法を悉知すべきなり。然るに爾来二十有余年、其の支流を汲むもの多しと雖も未だ本源を研めしものなし。此の如くにして果して改良を施し得べしとせんや。但し斯法の世に知られざるもの、一には従来邦語によりて是を紹介せしものなきに依らずんばあらず。」

川瀬は体操伝習所によって選定され確立・普及されてきた普通体操、兵式体操等の停滞を衝き、その研究・改善を提案しているのである。この研究・改善を進めるにあたっては、従来のあらゆる体操の源流であるところ

のスウェーデン式体操について知る必要があるということで、その紹介を行なったわけである。したがって、川瀬にあっては男子のための体育とか、とくに女子体育としてスウェーデン式体操をとりあげるといったことではなく、体育の根本的な改善のためという一般的な動機であったのである。

次にミス・ヒュースは身体的効果よりも精神的効果を重視したわけだが、この点において川瀬はどうであったかという点、ヒュースのような精神的効果の方を重視するということはしていない。彼はスウェーデン式体操における教育的体操の目的として次の三つのものをあげていた。²⁾

- (一) 身体各部の均齊的発達及び身体の強健を図る。
- (二) 身体を強壮にし、熟練と忍耐とを訓練し、以て活潑なる精神を養ひ、意志を強くし、決断力及び勇気を増すにあり。
- (三) 生徒をして厳密なる注意を為し或は命令に従って行動するの習慣を養はしめ、又は己れの意志を支配するに迅速に且精鋭ならしめ、將た又団体の為己を犠牲にするの精神を育成せしむるに在り。

このように、スウェーデン式体操の精神的・意志的要素がやはり目的として掲げられているけれども、身体的な要素に優位するというふうにはなっていない。川瀬は精神的なものと身体的なものを並列しているのであり、ただ挙げている順序からいうならむしろ身体的なものが先にきている。こういった点でやはりミス・ヒュースとの相違をみることができよう。

(ii) 井口アクリの場合

井口アクリの場合はミス・ヒュースと同じ女性の立場において女子体育、スウェーデン式体操に取り組んでいるので、両者の異同をみることは非常に興味深いものがある。

井口はミス・ヒュースとかなり共通な見方をしている箇所がある。彼女は従来女子の体育があまり問題にされなかったけれども「当今の時代になって見ますと女子だからと申して決してそう引込んでいるべきものでなく殊に今日のやうに女子体育ということが世間にやかましく言はれるやう

になってきた場合には先ず女から擡んで自分が其責に当って熱心にやって往かなければならぬことであらうと思ひます」³⁾ と女子による女子体育の推進を説き、体操教師がほとんど男子だけである実情を考慮して「……それですから女の子供達の頭に体操は男の先生方は出来るが女の先生は出来ない者といふ觀念が起りませう、それではどうもいけませぬ女の先生方も熱心になって男の先生方にばかり任かして措かずに教場でも或は運動場に出ても女の教師が自分自身手本になって、さうして生徒を能く奨励して往って下さるやうにしなければいけぬだらうと思ひます」⁴⁾ と女教師による体育指導の必要を語っていた。

しかし、女子体育そのものの認識においてはミス・ヒュースと必ずしも一致しない。井口は「……何んでも女らしく女らしくと云って体操だか遊戯だか分らぬグニヤグニヤしたものを教へて之を女子が喜んで居るといふやうなことを私は聞いて居りますが是は最も間違であらうと思ひます。(中略) 一体女の身体は男子よりも総ての組立が虚弱に生れて来て居るのが当り前でありますからそれ等の点からして色々斟酌して下さるのは有難いことでございますが併し女だからと申して、さうさう男と変ったものでもありますまい(中略) 体操に於ても夫々同様に多少取捨もしなければならぬし斟酌もしなければならぬといふこともございませう併し何んでも女にて難かしいから出来まいといふやうなことで遠慮して下さるのは誠に有難迷惑だと思ひます。(中略) 女でも段々導いて其の方に引いて下すのならば決して男の御方の思つてゐらっしゃる程弱いものではありません」⁵⁾ と女子の特性を強調することによってかえって女子の能力が十分に発達させられていない点を指摘し、むしろ女子の可能性を伸ばしてやる方向で女子体育を考えていたことが見出される。この点で彼女は「私は^{むこう}米国に参つて体操の学校に這入ったのでありますが^{むこう}米国では体操に男と女と変つたところは^(ママ)ございませぬ」⁶⁾ とも語っていた。

スウェーデン式体操が従来 of 普通体操に比較してすぐれているとする点は井口の場合も川瀬とほぼ同じなのだが、ただ次のように「精神上的の訓練」を強調し、これをとくに女子体育に必要なこととしているのは、ミス・ヒ

ュースと共通した態度がみとめられて興味深いところである。⁷⁾

「……私が特に女子に此の体操を遣らせたいと云ふのは今までの普通体操であると気性を練ると云ふことは出来ない例えは忍耐をさせるか若くは非常な決断を以て遣らせるかと云ふことは或は私共の教へ方が悪いのか教へられる方が悪かったのか兎に角逆も望み難いのであった男子の方は普通体操は假令何らあっても其上に兵式体操もあり其他撃剣柔術等で気性の鍛練を計ることも出来るが女子には絶えて爾う云ふ機会がない一二の女学校で薙刀撃剣などを体操の中に入れて置く処もあったやうであるが是れとても果して永続して効果を現し得たと云ふことを聞かないそれ故に此体操に因て身体の發育は多少好くなくても肝腎の体操目的たる精神上的の訓練は好く出来なかった瑞典式の体操は或物は非常に沈着の態度を取らなければ出来ず又或物は非常に決断を以てしなければならぬのでボンヤリして居たり又は粗暴輕卒な考へを持って居ては出来ないやうな運動が沢山ある。」

なお付言するならば、井口も学校体育は主に体操と遊戯を内容としていて明瞭に語っていた。この点でもミス・ヒュースと同様であったといえる。ただ、ヒュースの場合には遊戯の「自由」を主軸にしていたことは特徴とみることができる。

さきの川瀬の場合でも遊戯の存在は前提となっている。しかし、それは全体の授業時間をスウェーデン体操の演習の順序にしたがう形で構成し、そのうちの「行進」の節で「行進を主とする遊戯」や「操練」を、そして「呼吸」の前に「兵式」または「跳躍を要する遊戯体操」を挿入するというような方式をとったのである。⁸⁾

具体的にスウェーデン式体操と遊戯との関係をどのように調整していたかは別に検討されなければならない問題である——ミス・ヒュースの講演においてはこの点が明らかにされていない——が、とにかく三者はいずれも遊戯を認める立場をとっていたのであって、一方的にスウェーデン式体操のみを紹介・宣伝したのではないことを確認しておくことも大切である。

とくに、川瀬と井口は沢柳政太郎・高島平三郎等と共に文部省の体操遊

戯取調委員となった。その調査結果をまとめた取調報告（明治38年11月）は周知のようにわが国学校体育にスウェーデン式体操を採用することを明らかにしたものであったわけだが、同時にこの報告書は「運動遊戯」を大きくとりあげ、種々の方針や注意を示していたことも、⁹⁾ これまでみてきたような川瀬や井口の認識や態度からすれば決して矛盾するものではなく、どちらかといえはそれは当然の結果であったとみることができる。

- 1) 大日本体育会編『瑞典式教育的体操法』（編纂主任 川瀬元九郎）明治35年，同文館，緒言pp. 1—3.
- 2) 大日本体育会編，同前，pp. 2—3.
- 3) 井口あくり「女子の体育について」教育公報第270号（明治36年4月15日）p. 9.
- 4) 井口，同前，p. 13.
- 5) 井口，同前，p. 11.
- 6) 井口，同前，p. 11.
- 7) 井口あくり「瑞典式体操」体育第154号（明治39年9月25日）p. 49.
- 8) 大日本体育会編，前掲書，p. 16. 参照。
- 9) 井口あくり他共著『改訂体育の理論及実際』明治43年，国光印刷，附録pp. 31—37. 参照。

(5) 結 語

以上において、わが国に最初にスウェーデン体操が紹介・導入された頃の事情を若干検討してきた。そして、これによって川瀬元九郎が精力的に紹介・普及の活動に乗り出す以前に教育事情視察の目的で来日した元ケンブリッジ大学女子高等師範部長イー・ビー・ヒュース（Miss Hughes）が講演においてスウェーデン式体操〔体育法〕を最良の体育法として日本の教育界にすすめていたことが確かめられた。ミス・ヒュースのスウェーデン式体操のすすめは、明治34年10月のことであり、川瀬が『瑞典式教育的体操法』を公にして、スウェーデン式体操の紹介活動を本格的に開始したのは明治35年3月末で、約5カ月半ばかり時間的な差があった。

ミス・ヒュースのスウェーデン式体操のすすめそのものがどれほどの影

響を及ぼしたかは明確でないけれども、永井道明の記憶に臆気にとどまったように、それはやはり何らかの程度においてスウェーデン式体操に対する関心をひくものとなったことは否定できないように思う。川瀬元九郎自身がミス・ヒューズの講演を聴講したとか或は教育雑誌においてその講演筆記を読んだとか、その可能性は考えられるけれどもそういった事実を示す資料は見当らない。そうした直接の関連のあるなしにかかわらず、ミス・ヒューズのすすめが最初のものであり、それがわが国におけるスウェーデン式体操への関心を多少なりとも芽生えさせることになった事実が重要である。川瀬のその後の本格的な紹介活動の展開をみても、ミス・ヒューズによるすすめが、客観的にはその呼び水のような役割を果たしていたように見受けられる。

ミス・ヒューズがスウェーデン式体操をすすめたとき、体育の主たる内容を遊戯で考えていたわけだが、日本の川瀬や井口もまたそれぞれに遊戯を認め、体育に位置づけていた。それはやはり世界的な体育の潮流であったとみられる。問題はその遊戯と体操との関係であり、位置づけ方である。日本においてはこれが体操遊戯取調報告（明治38年）から学校体操教授要目（大正2年）への動きの中で、スウェーデン式体育の原理にしたがった形で体育授業の「定型化」が行なわれ、そこに遊戯が位置づけられていったのである。

また、スウェーデン式体操が精神的な効果において評価されるという側面をもっていたことも一般的な傾向とみななければならない。たしかに、ミス・ヒューズの場合は身体的効果以上に重視するというようにやや極端に述べている。川瀬や井口の場合にはそれほど強調していなくとも、やはりこの面を重視していた。とりわけ井口においては気性（＝気質）の養成ということはかなり強調していた。井口はスウェーデン式が「一々教師から命令を下して始めてそこに精神を籠めるので教師も生徒も一寸の隙のあることを許さぬ」¹⁾ものであるから、精神を働かさなければならないし、その訓練になっているというふうに述べていた。

川瀬や井口は、スウェーデン体操の優秀性をこの点においてだけ論じて

いたのでないことはいうまでもない。それは何ととっても生理的な法則性にしたがった運動の配列を行なったものであり、それはまた簡単なものから複雑なものへと段階的に進められる教程が編成されていて、まさに教育的な系統性をもったものと考えられた点が重要である。この点をミス・ヒュースの講演にたち帰ってみた場合明瞭にあらわされていない。しかし、川瀬や井口がスウェーデン式体操の紹介と普及の活動をすすめていく際にはこれが特徴的なものとして説いていったし、またこれが現実に普通体操を理論的・実践的に圧倒したものであった。したがって、そうしたスウェーデン式体操の特徴の認識が川瀬や井口において明確にされていた点をわれわれは十分評価しなければならないように思う。

ともあれ、日本の近代学校体育の体育授業の定型化の基本的な契機となったスウェーデン式体操がわが国に導入されてきた過程をふりかえってみるとき、英国から来日した1人の女子教育家の勧奨の事実が見出される。その教育家、ミス・ヒュースがその後日本の学校体育においてスウェーデン式体操がいかに大きな役割を果たすことになるかをこのときどれだけ予測できたろうか。しかし、彼女の母国イギリスにおいてはこの2年後の1904(明治37)年に最初の体育指導要綱“Syllabus of Physical Training”がスウェーデン式体操を基本に成立したのである。そして日本ではさきにもふれたように1905年の体操遊戯取調報告でスウェーデン式体操の採用が決定され、1913(大正2)年にスウェーデン式体操を基本とした最初の「学校体操教授要目」の制定をみた。²⁾ こうしたその後のスウェーデン式体操の展開をみたとき、やはりミス・ヒュースの見識の卓越していたことを考えなければならないように思う。

1) 井口あくり「瑞典式体操」体育No. 154 (前出), p. 49.

2) この成立過程については拙稿「学校体操教授要目の制定過程に関する一考察」中京体育学論叢 Vol. 6, No. 1, 1964. 参照されたい。